

平成三年十月例会資料

鴨方町史跡めぐり

一 戦国細川氏の史跡と

天台宗の古寺を訪ねて

講師 岩手県民俗部会長

種本 更

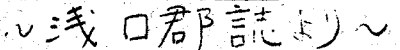
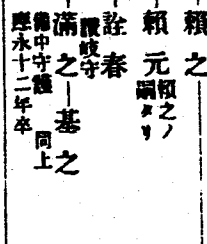
主催 備陽史探訪会

〒島根県福山市多治米所
五丁目十九番八号
電話(0854)531657

室町時代と細川氏

1338	暦応元	足利尊氏が將軍となる
1354	文和3	義詮が二代將軍となる
1356	延文元	細川頼元、山名氏(南朝側)を討つ
1368	応安元	義満が三代將軍となる
1391	明德2	明德の乱(まうりらん) 細川頼元が備中、備後の守護となり乱を鎮圧する
1392	3	南北朝統一 細川頼元が死ぬ
1394	応永元	細川頼長、基えが備後国半国守護に、細川満元が備中守護
1408	8	山名時熙が備後国守護となる
1414	14	細川満元が鴨山城を築城する
1429	33	義量が五代將軍となる
1441	30	細川頼重が備中守護となる
1442	33	義教が六代將軍
1444	嘉吉元	嘉吉の乱 赤松満祐が義教を討つ
1445	3	細川持元が赤松氏を討ち義勝を七代將軍にする
1446	3	義政が八代將軍
1465	寛正6	義政は弟義視を家督とし、細川勝元を後見人とするが実子義尚が生まれ、山名宗全(持豊)が後見人となる
1474	文明6	細川勝元、山名宗全、斯波、畠山家の家督争いに介入し対立する
1477	応仁元	応仁の乱が始る 東軍：細川勝元 西軍：山名宗全
1478	文明7	細川勝元が備中守護
1479	文明8	義尚が九代將軍 山名政豊と細川政元が講和
1491	延徳3	応仁の乱が終る
1493	19	尼子経久、富田月山城を奮還する
1497	義種が十代將軍	
1507	明応2	細川政元が義種を追放し、義澄を十一代將軍にする
1508	明応3	細川家の家督争いにより政元が討たれる
1527	5	細川高国が大内義興と共に義種を再び將軍にする
1538	7	細川高国が義種を追放し、義晴を十二代將軍とする
1539	13	細川政春が備中守護となる
1540	10	細川晴元、高国を追放し、管領となる
1541	9	山名理興が大内義隆により神辺城主となる
1542	10	尼子晴久、郡山城に毛利氏を攻め大敗する

1542	天文11	大内義隆 富田月山城に尼子氏を改め大敗する。山名理興尼子側へ寝返る
	12	神辺城合戦が始る
	15	毛利元就 家督を隆元へ
	18	神辺城合戦が終る 山名理興 尼子氏の元へ逃る
		細川晴元 三好長慶により追放される
	19	大内義隆 家臣の陶晴賢に討たれる
	21	尼子晴久 因幡伯耆備前備後の守護となる
		細川氏綱が管領となる
1555	弘治元	毛利元就 陶氏を討つ 山名理興 神辺城へ復帰する
	3	杉原理興が死去 杉原盛重が城主となる
1558	永禄元	宇喜多直家 鴨方城主 細川通政を討つ
		細川通董 元就に降る
	2	通董 伊予川え城より備中青佐山へ移る
	6	細川氏綱死去 管領職絶える
	8	義栄が十四代將軍
	9	元就 尼子義久を討つ
	11	義昭が十五代將軍となる。毛利氏大友氏と戦う
	12	藤井皓玄 神辺城を一時占拠するが 細川通董の家臣 赤沢修理亮により備中西大島(笠岡市)で討たれる
1573	天正元	織田信長 義昭を追放する 毛利・宇喜多氏講和
		宇喜多直家 岡山城に移る
	3	毛利元就 備中を統一する (三村氏を宇喜多氏と討つ)
	6	尼子勝久 上月城で自刃
	7	宇喜多直家 信長に降る
	10	本能寺の変 高松城の水攻め
		高梁川が毛利・織田の境となる
	15	細川通董 秀吉の島津出征に毛利輝元に従い 帰途 赤間関(下関)で死去 53才
		細川元通 毛利輝元に従い 朝鮮に出従する
1600	慶長5	関が原の戦い後 鴨方の細川家(元通)は毛利氏 (輝元)に従い 長州に移る。 (豊浦郡高野)



在城松山、備中守護
 元通
 在城鶴山
 元通
 元董
 廣通
 元純
 廣氏
 敬前
 義壽
 義郡

●武藏守、安房守、
 母ハ河野正少弼
 德曾通政ノ故、眞
 ハ民部少輔政者ノ
 男
 ●元文五年繼嗣、備
 中一國、豫州ノ内
 字麻瀨泉二郡ヲ領
 斯。
 ●天文二十一年八月
 義輝公ヨリ屋形就
 免許。
 ●同二十二年五月廿
 八日豫州松山城ニ
 辛、年五十、
 寺ニ葬ル。

●母ハ河野正少弼
 德曾通政ノ女
 ●天正十五年秀吉公九州
 島津氏ヲ討ツ、毛利
 輝元ニ從ヒ發向シ、歸
 陣ノ時長州赤間關ニテ
 七月晦日辛、五十三、長
 前寺ニ葬ル。長川寺殿
 前野州大守峯山淨高
 居士ト號ス。
 ●室ハ慶長二年八月廿二
 日卒、長川寺ニ葬ル。

●太郡、右馬頭、下野守
 ●實ハ安房守晴康ノ男ニ
 シテ、母ハ河野正少
 弼送智通政ノ女、天文
 四年松山城ニ生ル。天
 文
 ●伊豫松山縣瀨泉二郡ヲ
 領シ、天文五年字麻郡
 川ノ江城ニ移ル。
 ●永祿元年毛利元就ハ幕
 下トナル。
 ●同二年川ノ江城ヲ引拂
 ヒ、備中國瀨口郡鶴山城
 ニ移ル。
 ●永祿年中、義昭公京都
 御關之崎、功ニヨリ紫
 事ヲ賜ハル。
 ●天正十五年秀吉公九州
 島津氏ヲ討ツ、毛利
 輝元ニ從ヒ發向シ、歸
 陣ノ時長州赤間關ニテ
 七月晦日辛、五十三、長
 前寺ニ葬ル。長川寺殿
 前野州大守峯山淨高
 居士ト號ス。
 ●室ハ慶長二年八月廿二
 日卒、長川寺ニ葬ル。

●瀨口少輔九郎、彦左衛門尉、
 下野守
 ●母ハ大藏實ノ女、天正
 五年生ル。
 ●備中瀨口郡、備前國ニ於テ
 一萬石餘ヲ毛利輝元ヨリ受
 領ス。
 ●室ハ毛利元清ノ女（秀元ノ
 姉）
 ●文祿元年毛利輝元ニ從ヒ、
 朝鮮征伐ニ加ヘリ、累リ功
 ●毛利家ノ家臣等ト、蔚山
 ニ應城ス。秀吉遠ニ之ヲ聞
 キ、感狀ヲ賜フ。其文ニ曰ク
 非ル。

●寛文九
 年八月
 四日卒
 府中一
 寺ニ

●細川少輔九郎ト稱セズシテ瀨口ト稱スルハ、累年備中國瀨口郡鶴方庄ニ
 任ケ、國人瀨口屋形ト稱セリ。故ニ秀吉公瀨口ト稱ス。
 ●慶長五年關ヶ原役後、毛利輝元領地ヲ領ラレ、防長二國ニ封セラル。依
 テテ元通、備中ノ地ヲ引拂ヒ、輝元ニ從ヒ長州ニ至ル。秀元ト縁者ナル
 關係ニヨリ、其領地豐浦郡來川郡邑高野山ニ住ス。
 ●慶安三年正月晦日辛七十四、府中金山切山郡寺ニ葬ル。

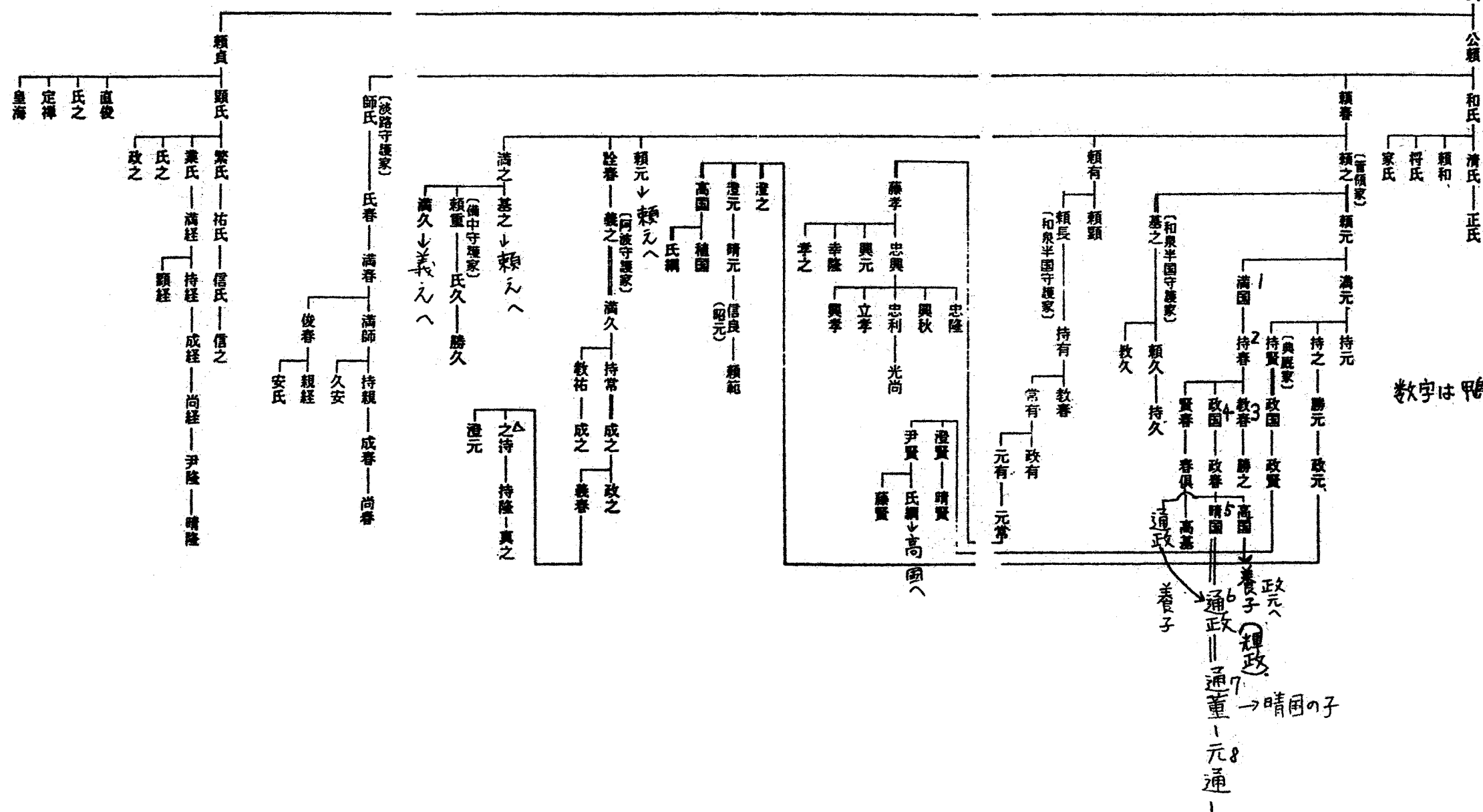
●今度蔚山表裏取詰候之處、靈粉骨之由、從安國寺具申越後關召屈所
 抄被忍旨候、猶田右衛門尉石田治部少輔可申也
 正月廿五日
 御朱印
 御朱印

●夫戸備前守とのへ
 瀨口少輔九郎とのへ

細川氏略系圖

(編結及作製)

義康——義清——義実——義季——俊氏

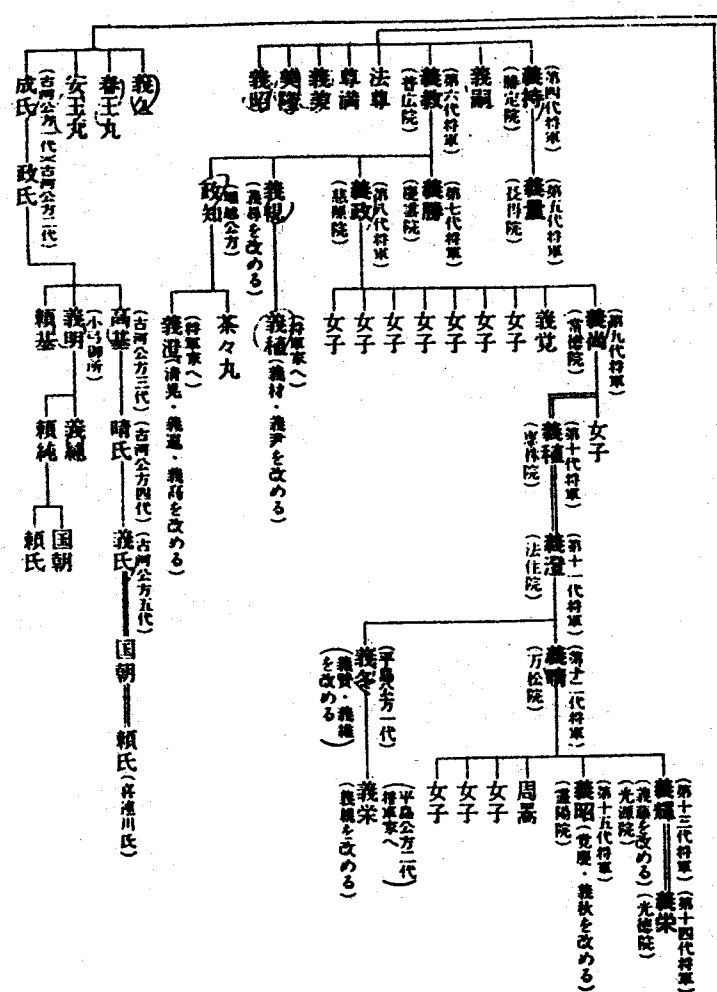
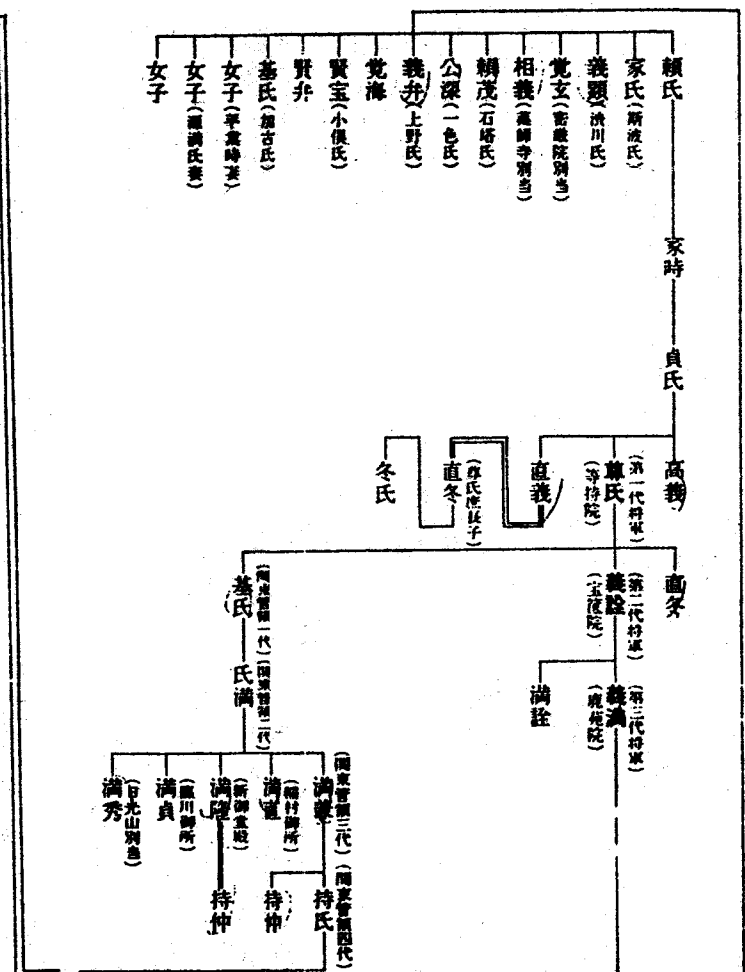


賴義 (清和天皇より)
 (四代略)

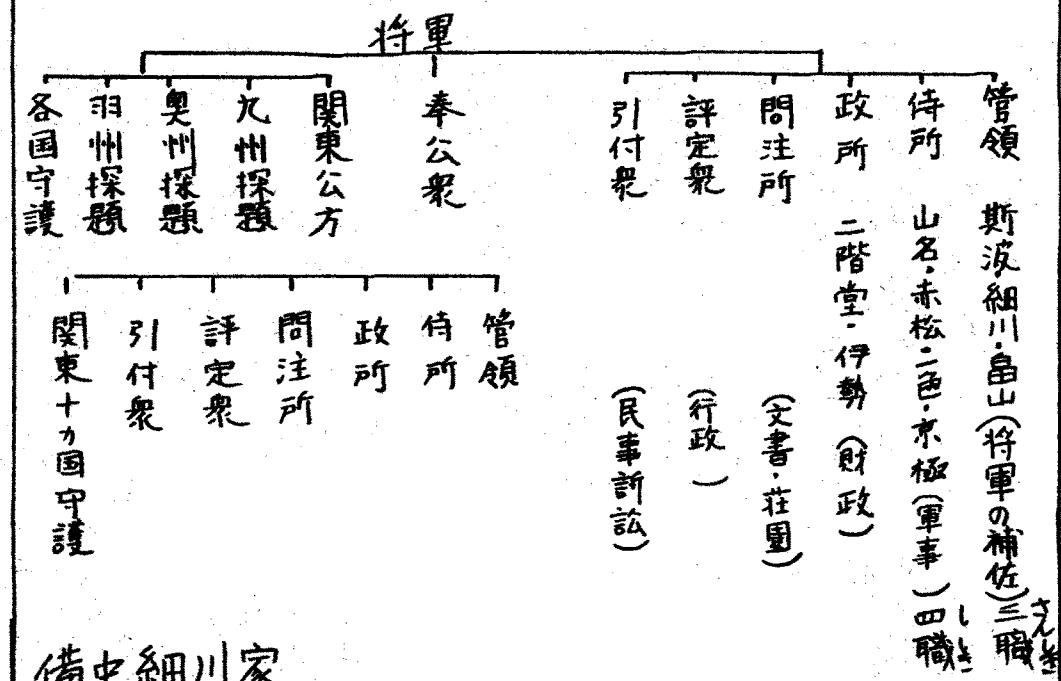
- 義光
 - 盛義 (平賀氏)
 - 義清 (武田氏)
 - 義業 (佐竹氏)
- 義綱
 - 義忠
 - 李邦
 - 義康 (足利氏)
 - 義重 (新田氏祖)
 - 義範 (山名氏)
- 義家
 - 義國
 - 義兼
 - 義氏
 - 義綱 (畠山氏)
 - 有氏
 - 最信
 - 女子 (新田政氏妻)
 - 女子 (四條隆盛妻)
 - 女子
 - 義親
 - 為義
 - 義朝 (賴氏嫡系)
 - 賴朝 (賴氏嫡系)

義清

- 義実
 - 義宗 (戸賀峰氏)
 - 義季 (細川氏)
 - 実国 (仁木氏)



天文18年(1549) 阿波の三好氏により管領細川氏は追放され
 その後 細川氏の支流が三好氏に擁されて管領になったがやがて
 永禄6年(1563) 三好氏により管領職は廃絶した。



備中細川家

細川満国は頼元、頼元を継いで管領となった満元の弟で 伊予国宇麻郡の守護となった。

鴨方町誌によれば 高国は備中守護であった。

応永14年(1408) 細川満国が鴨山城を築き以後8代子孫が城主を継いだ。7代城主細川通董は天文4年(1535)松山城で生まれ川入江城にいた。阿波の三好氏の乱入で 守護代石川氏の勢力が大となった為 永禄2年(1559)伊予川入江城より浅口郡大島村の青佐山に城を築き7年居城した。(以後浅口原と称す)その後六条院龍王山に城を築き9年居城し天正3年(1575)鴨山城に移

細川氏の系譜

細川氏は八幡太郎源義家を祖とし、足利義康の曾孫義季が承久の変(1221)後三河国額田郡細川邑(岡崎市北部)に移り細川を氏とした。足利尊氏が建武3年(1336)九州から畿内へ攻め上るに呼応し 細川一族は 四国の国人を率いて尊氏軍の重要な軍団となり 後の畿内における守護領国形成の端緒となった。以後 細川一族は 足利氏の政治、軍事面において重臣となり 守護領国として 畿内、四国、中国地方に勢力を確立した。管領となった本宗はじめ分家、庶流が多い。幕府への親疎、信頼の度合により格式が分かれた。

管領家

細川頼元は二代将軍義詮の遺命により管領となり幼少の義満を助け南朝を制圧し幕府権力の確立を図った。明徳2年(1391)全国66か国の6分の1をしめていた山名氏を討ち、山名氏に替り 備後の守護(明徳の乱)となった。(他に伊勢、備中、河波、讃岐、伊予、土佐の守護も兼)

頼元以後の管領は 斯波義将、細川頼元、畠山基国ら 足利一門が交代でつとめた。(三職、三管とよぶ) 応仁の乱の発端となった斯波、畠山氏は 乱により勢力を弱め 室町幕末は細川氏がつとめた。応仁の乱の東軍大将 細川勝元の子 政元は実子がなく 家督をめぐり 細川一族は分裂した。細川高国は 備中守護 細川氏の出で、大内義興を背景に 義種、義晴(12代)を将軍とし 管領となり 政治を独占した。

子 忠興の妻たま(ガラツァ) は 明智光秀の娘であたが 秀吉に
従い さらに家康に従い 子 忠利は 寛永9年(1632) 肥後54万
石の領主となった。

鴨方支藩

鴨方は

関ヶ原の戦い以後 毛利氏^{及び細川氏}は長州へ転封となり
幕府の直轄地となった。

池田光政は 元和2年(1616) 姫路城主を継ぎ 翌年
鳥取城に転封となり さらに ~~元和~~^{寛永}9年 24才の時 備前及び
備中の 浅口, 窪屋, 下道, 都宇 4郡を合わせ 31万石を賜い
岡山城主となった。 貞享元年(1684) 次男 政言が新田
25000石の鴨方支藩, 三男 輝録が15000石の生坂支
藩を分知され 以後 明治まで続いた。

藩主は 代々 岡山天神山(現オリエント美術館)に居住し
鴨方には 陣屋(現黒住教々会)を置いた。

岡山藩の寺院整理

寛文6年(1666) 池田光政は 領内 1035寺のうち 598
カ寺を破却した。 (日蓮宗寺院は87.7%, 真言宗は95.6%,
天台宗32.4% 全体では57.8% が破却)。幕府の日蓮宗不受不施派
禁制に沿った政策であたが 天台宗金山寺(備前国中本山)の許状
により 天台宗末寺の処分撤回となり 備前35カ寺は金山寺へ, 備中
19カ寺は 明王院へと 復活した。

った。これより先 永禄元年(1558)には父通政は宇
喜多直家に討たれ(浅口郡誌)。通董は23才の時毛利元就の
幕下になる。 天正15年(1588) 秀吉の島津出征に毛利輝元
に従い、 帰途 長州赤間関(下関)で死去。 子 元道は 秀吉の
朝鮮出征で殊勲を上げ感状を受けた。秀吉より「浅口」と称された。
関ヶ原の戦 後毛利氏に従い 長州へ移住した。

備後、備中の守護と細川氏

明德の乱(1390-91)の時 義満から 備中, 備後の守護を任
命され乱を鎮圧した 細川頼え 以後 頼長と基えが備後
の半国守護 に補任された。 応永8年(1401)になると
山名時熙が備後の守護となり, 頼長, 基えは和泉の守護となった。 頼えの
弟満え以後子頼重, 氏久, 勝久 が 備中の守護を世襲した。しかし
備中には在地せず 守護代の 荘, 石川氏が 勢力をもつよう
になり 勝久の代になると 細川氏の守護職は 名目だけとなった。
勝久の養子 え持は 阿波の守護細川家を継ぎ、 細川政春が
備中守護を継いだ

肥後細川家

細川頼えの弟 頼有は和泉(大阪府南部)の半国を領し, 子 頼長
が 基えと共に和泉 の守護職となった。 頼長から7代目の
細川藤孝は 将軍家につかえ、 15代将軍義昭と 信長の仲だちをした。
本能寺の変の後 幽斎と名乗り 歌, 茶など文化的指導者となった

鴨方町の史蹟（鴨方町教委発行、鴨方の史蹟より抜粋及び加筆）

長川寺

清滝山長川寺は曹洞宗の寺院で、大本山は横浜鶴見の総持寺、中山山は井原の永祥寺である。寺伝によれば、源三位頼政四代の末裔、西山宗久を開基とし、後、応永十九年（一四三二）英巖（いんがん）禪師が開山した古刹である。その後、鴨山城主細川氏ゆかりの禅寺として栄えたが、不幸にも応仁の兵火に遭い伽藍を焼失した。しかし三代城主教春の献供を得て、三世等巖（らんと）字倫和尚が再興し、又天正年間、七代城主通菴より寺領百二十石の寄進を受けるなど、寺門は日に興隆した。後年、幕府をはじめ池田輝政等の寄進も相次いだ。元和年間の水害、山崩れなどの為、伽藍什器の総てを流失した。しかし十二世徳雲重慈和尚の威神力によって、元禄十七年（一七〇四）再々建された。それが現在の本堂である。寺域千八百六十坪の境内には通菴の墓やお庭師弥兵衛の手になる文化年間の築庭などがある。

鴨山城址

備中守護、細川氏初代満国による応永十四年（一四三七）の築城であり、以来慶長五年（一六二〇）八代元通の長州転封までの百九十余年間の歴史を物語る城址である。長川寺の山門より望む西北五百米の山頂にある全長約二五〇米程の連郭式山城であり、本丸の北に三つの郭、南東に四つの郭が設けられ、北の第一郭の北には深い堀切、記念碑の建つ南東第四郭には野面積みの石垣がある堅固な構築である。城址に建つ自然石の碑は第七代城主通菴の三五〇回忌を記念して家臣の後裔、清滝会員によって昭和十一年に建立されたもので、表面に「鴨山城址」裏面に「細川公之遺趾・家臣之後裔建之」とあり、男爵、原田熊男の揮毫によるものである。

細川満国の備中守護説には異論がある。細川氏以後は家臣の高戸、赤澤氏他が

城を受け継いだとの説。城の西南にシュリンデロと呼ばれる地があり、家臣赤澤修理亮一永禄12年（西大島空圖）で藤井皓玄を討つのに屋敷があった。

※「細川下野守由緒」によれば

鴨山城は細川備中守義春（政春）開基

鴨方陣屋跡

大字鴨方にあり、鹿藩後屋敷跡は畑地となっていたが、明治二十四年七月そこに現在の黒住教鴨方教会所が建てられた。今も使用している大井戸は鴨方藩陣屋当時のもので、良質な清水が湧出しており、井戸屋の用材は、陣屋が取り除かれた際の鹿材をそのまま使用したものである。

なお、旧建物の一部は現在深田立脇にあり門の一部は同じく深田の西之谷に移築され、又、池田家の定紋「喰蝶」を配した大瓦は長川寺に保管されている。

西山拙斎

拙斎の高祖父は猿掛城主穂井田元清に仕えたが、曾祖父志摩（坂本家より入婿）の代に鴨方へ移った。

父恕玄は医師である。拙斎は十六才の時上阪して古林見宜に医術を、岡孝斎、那波魯堂に儒を学ぶ。安永二年（一七五三）三十九才の時、郷里に帰り塾を開いて専ら子弟の教養に尽した。この塾を欽塾という。

今、岡大所蔵の絵図面によって当時の陣屋の姿を見ると、表御門、溜り長屋、勤番所、御座敷、吟味場、御囲米御蔵、宰番詰所等の建物が揃っており、大石垣を回らせた屋敷は、長さ「東西平三拾壹間二歩五厘、南北平拾八間、此の歩数、畝数に直して、宅反八畝二拾二歩也」と記録してある。

鴨方往来

旧藩時代、岡山藩の定めた官道は、栄町（現岡山表町二丁目）を出発点として、西に道をとり、途中生坂（生坂藩の所在地）に至る支線を分け、笠岡旧小田県庁跡（現笠岡小学校）に至る長い街道であった。

金光町より鴨方町川手部落に入り、鴨方川の土橋（旧称であり今は近代制となる）を渡ったその西袂を「駕籠屋の辻」という。棕の大樹があり、その下に床几などを置き、駕籠かきの溜り場になっていた。次いで三日市に入る。左手に田中索我の屋敷跡があり、次いで旅籠屋数軒が軒を並べていた。佐渡寮、研屋、塩屋などで、その中今に残っているのは佐渡屋（旧佐渡寮）のみである。

本町より西町に入ると右手に県下に遺る江戸初期の貴重な町屋、高戸家が三百年の面影を誇っている。やがて西山拙斎の欽塾の跡を左にして、鴨方藩陣屋跡の大石垣の下に達する。

高戸家の本宅

高戸家は有数の旧家で、江戸時代には大名の宿舎にも当てられたという。建築年代は、貞享四年（一六八五）に修理をしたという棟札から約三百年を経たものであることが知れる。本体の部分は、店、土間、台所に当てられ、道路側にある表棟は来客用、裏棟は居住空間に当てられている。茶室、水屋は天保七年（一八三六）の増築であり、広い屋敷の北寄りには土蔵があり、なお湯殿、離れ座敷があるが、破損が甚だしい。大戸口は、くぐり戸を持った格子戸と板張りの片折戸が、又店の正面は太い格子戸が取り付けられ、座敷部分には、まばらな出格子と庭中門を持った腰板張りの土塀にしている。屋号を「奈良屋」と呼び、奈良より移住したと伝えられているが、古い奈良地方の町屋と類似しており、県下に遺る江戸初期の最も貴重な町屋である。

明王院

真岳山長泉寺明王院は、宗祖伝教大師が入唐の途次立ち寄られお開きになった天台宗のお寺で、次いで承和年中（八三〇）八幡祖師の跡を継いで慈覚大師が秘密灌頂の道場とした。以来時代と共に隆昌に向い備南の地、数百年の末寺に伝法してきた。

年移り寿永年中（一一八二—一一八五）平家滅亡と運命を共にされた悲劇の幼帝安徳天皇の行在所「六泉の御所」が、当寺の背後泉山の麓に設けられ、暫く御滞在になった。

これより後の寛永十九年（一六四二）の火出により堂宇は全焼し、又寛文六年（一六六六）池田光政の社寺整理で、末寺二十五坊を失なう。次で延宝元年（一六五三）の大洪水で諸堂、寺田等が崩壊したが、第二十二世天祐和尚が、堂々辛苦郡内五万人講等の援助によって復旧再興し、今日開創以来千百余年の法燈を伝えている。



（藤沢 晋「岡山の交通」より）

近世の主要道路と宿駅

円珠院

六条院西、龍王山の麓にある。桜見山長徳寺円珠院という天台宗の寺院である。その昔、慈覚大師が入唐求法を終えて承和十四年(八七二)帰朝し、太宰府に着くや道々布教を重ねて東上し、比叡山第三世の座主となったのであるが、其の途次、本町でも明王院を始め遙照山にも掛錫(僧が留まること)した。其の際、龍王山にも立ち寄り、山中に泉が湧くのを見付けて「未曾有の清浄水である」と愛でて御修法に用いた。此の聖地を阿伽井坊と名付けてここに草庵を建て、大師を開祖とした。

降って正安元年(三三六)第十世仙明和尚の時坊を山麓に移して長徳寺と号し、次いで永禄九年(一五七六)細川通直が龍王山城主となるや、当寺院を現在の地に移し、寺田等も寄進した。其の後火災に遇い焼失したが、寛文元年(一七六二)第二十世泉盛和尚が殿堂を再建して円珠院と号し、今日に至っている。

円珠院の宝塔

現在の円珠院境内を右にとつて登ること凡そ二百米、旧寺跡に一基の立派な宝塔が建っている。此の宝塔は永禄(二五八、二五九)の頃、当龍王山城主であった細川通直が本寺の縁起を聴き、大般若(おおだんな)となり、寺院を現在の霊域に移したが、その際旧寺跡に供養のために、この宝塔を寄進したという。台石は縦横各九二cm、高さ六七cm、塔身は回り一八八cm、高さ六二cm、笠石は下底の長さ、縦横共に各七六cm、相輪は高さ九三cmである。塔のある場所の下段には、旧寺跡の屋敷跡と思われる、かなりの平地がある。

長門下野守由緒一巻

長門下野守由緒一巻



龍王山城切手
冷山ニメキウ不得
登今、名斗、三

豊臣家
九州征伐之敗諸國一同山城棄之後
構平屋、今耳所、北殿、云

大島の傘踊り

註 有岡金作家所蔵の古文書「細川下野守由緒」の電子コピーをもととして、さらにコピー印刷したものである。古文書に暗い筆字には同時の筆字になるものか判定しがたい。ただ、巻末の信吉という署名を信用すると、同じ有岡家所蔵の「有岡氏系譜」によれば、信吉なる人物がいたことがわかる。同系譜には、

信吉 有岡又五郎重保十二年五月七日死没身養養子信士 養父田村今井氏女重保十八年十二月五日死没身養養子信女

とある。

大島の傘踊りの由来(説) ~大島の傘踊りより抜粋~

貞享3年(1686)7月晦日に、通董公の一百年忌の大法要が、長州名代藤沢徳太夫、河田瀬兵衛、吉見弥左衛門等の指揮によって、長川寺で執行された。この折、通董公の幕下、残党、縁故者が多数参列し、焼香したが、その姓名は古帳の通り記されていることは、100年の後にして、なお、公の徳を慕う者が多かったことと、当時、江戸封建時代にあつて、かかる古式に則つて、戦国時代の領主の大遠忌を執行したことに限らない歴史的興味をそそられる。

大島村からは、大島簡助、原田和泉守をはじめとして、有岡新之丞、今城掃部介の末葉など多数の者が婦人同伴で参列した。

この日の夕刻、毛利家の御名代の許しを得て、公の霊前において、大島簡助が音頭をとり、今井又左衛門が太鼓を打つて、原田和泉守を先頭に、婦人をまじえて、武芸のはしほしを踊りに仕組み、公の回向のために即席踊りを奉納した。

当日、たまたま、夕立があり、各人用意していた傘を武器がわりに用いたので、自然に傘踊り(かさおどり)となったという。旧主を偲びつつ奉納した優雅な踊りは御名代をはじめ参列者一同に深い感銘を与え、ともどもに公の菩提を弔ったという。

これが、今日の大島の傘踊りのはじめであるという。

傘踊りは当日、4種目踊ったという。その後、傘踊りを基本に、各種の手踊りが工夫、追加されて、盆の供養踊りとして、当地方各地で盛んに行われ、今日に及んだとされる。

大島踊り(大島傘踊り)の全盛期は天明7年(1787)前後であつた。当時の大庄屋(原田和泉守の後裔)は踊りが好きで、時にお上から御停止などの達しがあつても、大島踊りは供養踊りであるから、心配することはない、供養は怠ってはならぬ、踊れと百姓たちにすすめた。また、大島踊りは厄病よけだから踊れと、皆の衆に呼びかけて踊ったものである。しかし、徳川幕府では、老中水野忠邦が儉約令を勵行したという時代でもあつたので、世間態もあるからとして、太鼓は遠慮して樽の底を太鼓がわりにたたいて踊れと、とどまることなく踊り続けたと伝えられている。なお、この全盛期には、傘踊り、手踊りなど、あわせて20種目あつたというが、現在は14・5種目しか伝えられていない。

